KWU
図書館だより

Library News

No. 14 2010

特集

・第9回図書館資料特別展観「図書館資料によむ 神阪雪佳」展 記念講演会報告
・資料紹介「画人の書斎 ―雪佳の場合―」

Kyoto Women's University

Contents

図書館長だより

キンドルに思う　図書館長　御領　謙 …… 1

図書館ニュース

平成21年度図書館資料展観 …… 3

京都女子大学図書館　蔵書検索（OPAC）が新しくなりました! …… 4

特集1 展観記念講演会 報告

第9回図書館資料特別展観
「図書館資料によむ 神阪雪佳」展　記念講演会

「神阪雪佳と竹内栖鳳」　家政学部教授　廣田　孝 …… 6

「琳派の雪佳」　細見美術館学芸員　福井　麻純 …… 14

「雪佳の図書の問題」　短期大学部教授　八木意知男 …… 18

特集2 資料紹介

画人の書斎 ―雪佳の場合―

京都女子大学図書館「雪佳研究会」 …… →

△『滑稽図案』裏表紙

△『滑稽図案』表表紙

表紙の図案について

書名:滑稽図案
出版:芸艸堂、2003年
著者:神坂雪佳（かみさかせつか）
請求記号:727/Ka38

この図案書は明治三十六（1903）年、山田芸艸堂より出版されたものの重版。
平成21年11月に開催した第9回図書館資料特別展観「図書館資料によむ 神阪雪佳」展及び展観図録でも紹介し、人気の高かったものです。

図書館長だより

キンドルに思う

図書館長　御領　謙

今、2010年2月である。そして私は今年70歳になる。なぜこれを述べるかというと、図書館をめぐる状況が、次の10年でおそらく大きく変わるであろうと思われ、ここで私個人の図書等の文書利用の履歴と現状を述べておくことが、十年後にその間の変化を測る道標となるのではないかと思うからである。

長い年月を教育と研究の世界で過ごしてきたが、実験心理学を専門とする私がこれまで仕事の上で必要とした主な情報源は、内外のできる限り新しい学術雑誌と専門書であった。仕事のスタイルとしては文系の人々よりも自然科学系の人々との共通点が多いと思われる。

私が大学院に入ったのは1964年のことである。今は平凡な電子コピー機ゼロックスが、初めて図書館に設置されたのが修士の学生時代であった。そのときの感激が忘れられない。読みたい雑誌論文が見つかるとただちにそのコピーが手に入るのである。それまではどうしていたか。学部生のころは、演習などで発表するとなると、研究雑誌から論文を選び、図書館でノートをとりながら読み、レジメを作り、謄写版印刷をして出席者に配っていたのである。大学院に入ってからは、読みたい論文を自分で写真に撮って現像し、薄い特別の印画紙に焼き付けて手に入れていた。発表するときには、それを原版として、当時青焼と呼んでいた湿式複写機でコピーをしていた。研究会で輪読するにしても、洋書などは高くてめったに買えず、一冊の本をこのようにして丸ごとコピーしたことも多い。これらは恐ろしく時間のかかる作業であった。したがってゼロックスの出現はまさに夢のような出来事であったのだ。だがその後の文書情報利用技術の変化となると、いちいち夢のようだと感激しているいとまもないほどに想像を絶するものであった。

私がリアルタイムに経験したその後の変化の始まりは、言うまでもなく電子計算機の普及である。私は多量の数値的データを扱うことが多く、電子計算機との付き合いは長い。1966年ごろに始まり、真空管式電子計算機を操った経験もある。電子計算機が複雑な計算をたちどころに処理する科学技術上の道具であるばかりか、それ以外にも多様な機能を担いうるものであるとの認識は当時からもっていた。しかし、数十年のうちに今日のような様相を呈するようになるとは思いもよらなかった。ワープロが開発され、個人用電子計算機パソコンと一体化した。そのパソコンを結び目として、世界中があっというまにインターネット社会と化した。そして大量の文書、画像、音声情報が瞬時にして世界中を駆け巡る時代となってしまった。今ではわずかの経済力と知識があれば、一般市民の誰でもがその発信者となり受信者となることができる。携帯電話の普及がこのことに拍車をかけている。

1990年代には、学問の世界では学術雑誌が電子化され、研究室にいながらにして世界中の最新の論文が読めるようになった。必要な新刊の専門書は研究室にあるし、実をいえば、私は研究を目的として図書館に行く必要はほとんどなくなってしまった。さまざまな発表資料の作成や論文の執筆は、すべてパソコン上で行ってしまえる。すでにかなりのものが電子化されているが、もし専門領域の単行本のほとんどが電子化されれば、私の専門領域では、紙の印刷物に一切手を触れずに研究論文を執筆することも可能であろう。もはやこの流れは変えられないと思われる。そしてそれはあらゆる学問領域、あらゆる読書の世界におよぶに違いない。次に述べる最近の私の感激的な経験が、この確信をさらに強固なものとする。

私は2か月ほど前にKindleという電子ブックリーダーを手に入れた。この装置の大きさは、縦203.2mm 横134.6mm 厚さ9.1mmで、重さは289.2gである。表示画面は6インチであり、液晶パネルではなく、電子ペーパーが使用されている。モノクロ画面であるが、文字は鮮明であり、背景とのコントラストも目を疲れさせない。文字の大きさも可変で、行数と文字数を自分の好みに調整できる。ページ送りも指一本で容易に行え、切り

替わりの速度にもストレスを感じない。薄いA5版か新書版を手にしている感覚であり、今では就寝前のひと時のかけがえのない友となっている。つまりこの電子ブックリーダーは真に読書の楽しみを私に与えてくれているのである。いま感じている若干の不便さは単なる技術的問題である。この種の機器のこれまでの発展の仕方から見て、さらに快適な読みが可能な製品が、今後次々に追従してくるであろう。

Kindleで本を読むにはAmazon社から電子ブックを購入する。同社が同機用に販売している電子ブック数は日々増大しており、現在は約40万冊であるという。他に一流新聞、雑誌それぞれ数十種を定期購読できる。Kindleはパソコン等とは異なり、読書専用機といってもよいが、その主機能として世界の主要地域全域で利用可能な無線通信機能があり、日本のほとんどの地域から簡単に同社のショッピングサイトに無料で接続できる。私は山陽新幹線の中でも専門書を一冊買った。買うにはまず、同社にクレジットによる支払い方法を登録しておき、検索システムを用いて書棚を見るような感覚で欲しい本を見つける。その本の目次や冒頭の一部からなる見本がクリック一つで無料で読める。いよいよその本が欲しいとなるとBuyというアイコンをクリックするだけだ。何百頁もの本が1、2分でダウンロードできる。買った本は何万冊になろうが、書庫もいらずに好きな時に一生涯読める(はずだ)。文学作品や他の娯楽本とともに学術書も多数販売されている。私の専門のかなり限られた範囲にも新旧合わせて800冊程度が見つかる。そして少し工夫がいるが、Kindle用の有料本以外にも無数の無料の電子ブックを読むことができる。私は夜な夜なそれこそ万巻の書物の森の中を一文も使わずに逍遥する。そして昔読んだ懐かしい本が見つかったり、気に入ったベストセラーが見つかると早速購入して読みふける。学生時代の私にはこんな幸せを享受できるなどとは夢想だにできないことであった。もし、電子ジャーナルと同様に、大学図書館において本格的に電子ブックが利用可能になれば、私はどれだけ幸せになれるであろうか。今はKindleで外国人作家の小説やミステリーを楽しんでいるが、できれば仕事にも全面的に利用したいし、楽しみとしては、布団にくるまりながら藤沢周平や池波正太郎の世界に自由に遊びたい。時には内外の歴史書やプラトンを覗き、また時にはニュートンのプリンキピアの一部を齧ってみたいものである。

しかし、残念ながらこの幸せへの道も今はまだ半ばである。Kindleでは英語の本しか読めないし、欲しい本は個人で購入するしかない。そして日本ではまだ電子ブックの機器とコンテンツの双方において、幅広く実用段階に入っているとは言えない。機器に関して言えば、誰とは言わないがKindleを評した識者の言葉に、「日本では多機能携帯電話の文化が浸透しており、Kindleのような電子ブックは受け入れられないであろう」というのがある。しかし私には今一般的な携帯電話の画面の大きさで、質の高い読書や、読書の真の楽しみが味わえるとは到底思えない。関係業界の意識革命が必要であろう。

私は本格的な読書となると、読書に適した機器がどうしても必要ではないかと考える。私のようにKindleにすら満足している人と違い、もっとうるさい人々には、五感をもって読書を楽しむことのできる機器の開発が必須であろう。読書専用機に限らず、それがパソコンや携帯電話やテレビ電話の機能を持っていてもよいが、軽く、読書向きの大きさと快適な操作性を備えた機器が望まれる。そんな機器が開発され、出版界がその気になれば、今携帯でマンガや携帯小説を読んでいる層ではなく、本格的な読書層をとらえることができるに違いない。日本のこれからの変化を期待を持って見守りたい。

最後に図書館に関わる一員として一言述べておきたい。図書館関係者であればだれでも、上に述べたことなど先刻承知のことである。そして、いろいろな先駆的試みが国内でも見られる。ではわが図書館はどうすればよいのか、このことを私は同僚とともに真剣に考えている。古書、貴重書はいうにおよばず、印刷本はこれからも大切にしなければならないであろうし、基本的には大学における図書館の重要性はむしろ増すであろうと考えているが、明確な答えはまだない。ただ、漠然とはしているが、なにか夢のような世界が見えているとだけは言っておこう。キーとなるコンセプトは「人と人との熱い知的交流の場」である。

平成21年度　図書館資料展観

図書館では本学が所蔵する貴重書等を公開するために、錦華殿にて展観を実施しています。平成21年度は5回実施しましたが、いずれの展観も学内外より多くの来場者があり大変好評でした。

1 平成21年度春季図書館資料展観
「京都地誌類に見る　祇園社景観の変遷」
期間：平成21年6月1日（月）～10日（水）10日間
場所：錦華殿

2 平成21年度夏季図書館資料展観
「絵本展 ―ロシア絵本の原画と『ハンディキャップ』絵本―」

- ロシア絵本の原画 …… 期間：平成21年6月19日（金）～29日（月）21日を除く10日間　場所：錦華殿
- 「ハンディキャップ」絵本 …… 期間：平成21年6月26日（金）～29日（月）4日間　場所：C校舎3階第二会議室

3 平成21年度秋季図書館資料展観
「西国三十三所 ―観音を巡るものがたり―」
期間：平成21年10月23日（金）～11月5日（木）25日を除く13日間
場所：錦華殿

4 第9回図書館資料特別展観
「図書館資料によむ 神阪雪佳」
期間：平成21年11月19日（木）～12月2日（水）14日間
場所：錦華殿

5 平成21年度冬季図書館資料展観
「プライベート・プレス展 ―ケルムスコット・プレスを中心に―」
期間：平成21年12月8日（火）～22日（火）20日を除く14日間
場所：錦華殿

また、平成21年11月28日（土）に開催した**「図書館資料によむ 神阪雪佳」展 記念講演会**も大変好評でした。
（講演会の内容については、P.6～21をご覧ください）

「ハンディキャップ」絵本 展
展示した点字絵本や布絵本等は実際に手にとって見てもらえるようにしました。

「西国三十三所 ―観音を巡るものがたり―」展
西国三十三所関係の図書資料や、札所と関わる古典作品（奈良絵本『鉢かづき』等）を展示しました。

「図書館資料によむ 神阪雪佳」展
明治～昭和初期に活躍した京都の図案家、神阪雪佳（かみさかせつか）の著作品（図案集等）や彼と関わる資料を多数展示しました。

展観図録　展観の図録を作成して、来場者に配付しました。

平成22年度も数回展観を予定しています。
開催日程等は図書館の掲示板やホームページでお知らせします。是非ご来場ください。

京都女子大学図書館 蔵書検索（OPAC）が新しくなりました！

図書館が所蔵している膨大な図書資料（図書・雑誌・視聴覚資料）や図書館が閲覧契約している電子ジャーナルの情報は、図書館システム（OPAC）によって管理運営されています。OPACを利用すると「探している資料が本学図書館にあるか？」「探したい情報についてどんな資料があるか？」などを調べることができ、資料検索の一助となります。

平成21年8月に図書館システムの入れ替えを実施し、「京都女子大学図書館　蔵書検索（OPAC）」が新しくなりました。便利な機能も加わりましたので、大いに活用してください。

1 「京都女子大学図書館 蔵書検索（OPAC）」を利用するには

京都女子大学図書館ホームページ
http://www.kyoto-wu.ac.jp/library/index.htm へアクセスし、
トップページ画面の「京都女子大学図書館 蔵書検索（OPAC）」からアクセスしてください。
※「京都女子大学図書館 蔵書検索（OPAC）」画面へ直接アクセスする場合は、http://lib.kyoto-wu.ac.jp/opc/ へアクセスしてください。

2 「簡易検索画面」・「詳細検索画面」

資料区分欄に**「電子ジャーナル」**が加わりました。
検索結果の詳細情報画面にある「電子ジャーナルその他へのリンク」ボタンをクリックしてください。図書館が契約している電子ジャーナル等へリンクしていれば、パソコン画面から論文や雑誌を閲覧することができます。

3 「新着図書」・「新着雑誌」・「雑誌一覧」・「貸出ランキング」

資料検索に活用してください。

4 「Myポータル」

個人向けサービスを始めました。「Myポータルログイン」画面に情報システムセンターから発行された「ユーザー名」と「パスワード」を入力すると、自分のサイト「My Library」が出てきます。

【主なサービス内容】
- **予約・貸出状況確認** …… 現在の状況が表示されます。
- **図書館からのお知らせ**
- **あなたへのお知らせ** …… 延滞状況、取置状況、貸出停止状況等が表示されます。
- **貸出履歴一覧** …… 自分の貸出履歴が表示されます。

※終了時には必ず「ログアウト」をクリックしてください。
※「Myポータル」サービスは京都女子大学図書館の利用者（本学専任教職員・学生）限定です。

5 「携帯版OPAC」

携帯電話からOPACを利用することができるようになりました。
ただし、通信料（パケット通信料等）は利用者の負担になりますのでご注意ください。

【利用内容】
- **蔵書検索**
- **貸出状況確認**
- **図書館からのお知らせ**
- **開館スケジュール**

【京都女子大学図書館ホームページ トップページ画面】

1 「京都女子大学図書館
蔵書検索（OPAC）」をクリック

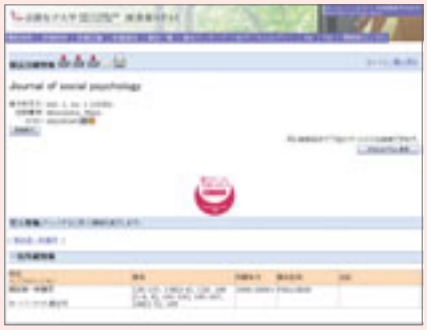
図書館が契約している
・データベース
・電子ブック
・電子ジャーナル
などはここから利用できます。
クリックしてみてください。

「ヘルプ」をクリックすると、
OPACの詳しい説明を見る
ことができます。

【京都女子大学図書館OPAC トップページ画面】

新しく加わりました。

【検索結果の詳細情報画面例】



【Myポータルログイン画面】

特集1 展観記念講演会 報告

第9回図書館資料特別展観「図書館資料によむ 神阪雪佳」展 記念講演会

文化庁による平成21年度「文化芸術による創造のまち」支援事業「知となごみのまち新東山文化創生・平家物語と〈今〉をつなぐ」の企画として、新東山文化創生実行委員会との共催事業の一環で、第9回図書館資料特別展観「図書館資料によむ 神阪雪佳」(平成21年11月19日(木)～12月2日(水)、錦華殿)展と記念講演会(平成21年11月28日(土)、B501教室)を開催しました。講演会では3名の先生方にそれぞれのテーマでご講演いただきましたので、ここにご紹介します。

「神阪雪佳と竹内栖鳳」

家政学部教授　廣田　孝

神阪雪佳(かみさかせっか)と竹内栖鳳(たけうちせいほう)はひとことで言うと明治期京都の図案家と日本画家である。そして両者は工芸・美術という造形芸術の世界に限って生きていたように思われる。ところが、ふたりはそれぞれの分野で活躍しながら、同時に産業界とも結びついた活動を行っていた。本論では両者を賞賛するのみの内容ではなく、産業界との結びつきの中で、両者を比較してそれぞれの特徴と、果たした役割についての考察を述べたいと考えている。また今回の錦華殿での展示テーマであった「神阪雪佳」の名称表記についても新しい知見を紹介することとしたい。

1. 神阪雪佳と竹内栖鳳の共通点

神阪雪佳と竹内栖鳳にはいくつかの共通点がある。次にそれらを列挙する。この手順によって両者を比較する際の枠組が明らかになる。

①生年と生まれた場所

神阪雪佳は慶応2年(1866)生まれ、竹内栖鳳は元治元年(1864)生まれである。西暦でみれば、一目瞭然のように2歳しか離れていない。しかも両者ともに京都市内の生まれであり、二人の生まれ育った環境はほぼ同じと見て差し支えない。

②勤務先

神阪雪佳と竹内栖鳳は京都市美術工芸学校に勤務していた。神阪雪佳は明治33(1900)年に、京都市美術工芸学校図案調整部技師として、この学校に配属になり、36(1903)年に兼任教員、38(1905)年に教諭となっている。栖鳳は明治16(1883)年に京都府画学校出仕として勤め始めたが、明治27(1894)年、京都市美術工芸学校教諭として正式採用になった。学校名が違うから別の学校のように思われるが、この学校は所管変更、学則変更などを機に校名変更を繰り返したが、基本的には一貫した学校である。(註1)

また両者は海外万国博覧会視察に出張している。神阪雪佳は明治34年、グラスゴー博覧会視察、竹内栖鳳は明治33年、パリ万国博覧会視察である。明治30年代に海外に出て西洋体験を持つという事は、両者が時代をリードする役割を担っていたことを示す指標になるであろう。

③髙島屋

神阪雪佳と竹内栖鳳は髙島屋で染織図案の原画を制作していた。現在の髙島屋は国内有数の百貨店であるが、当時の髙島屋は呉服を扱っており、同時に輸出用の染織作品なども制作していた。日本画家が染織作品の原画を描き、それを友禅や刺繍などの技術者が作品に仕立てた。ふたりはここでも同様の仕事をしていた。

④両者の没年

両者は共に昭和17(1942)年に亡くなっている。神阪雪佳は京都で亡くなったが、竹内栖鳳も同年、静岡県の湯河原で亡くなっている。栖鳳は晩年を湯河原に設けた画室と京都と行き来していた。

両者の年譜から行動範囲や行動時期を述べると以上のようになる。(註2)

この時期は幕末から明治維新の混乱期である。ふたりはちょうどその時期に京都に生まれ、天皇の東京遷都に伴う京都が政治経済的に落ち込んだ時期に青年時代を過ごし、ずっと京都を中心に活動した。そして昭和17年に亡くなるまで京都で影響力を持っていた。

両者の相違点を述べると、神阪雪佳は琳派の近代的な解釈を通して図案・デザインの世界で活躍したのに対して、竹内栖鳳は日本画の革新を進めて、写生を主とした近代的な日本画を確立した。

このようにふたりの行動範囲を見ていると、次に両者が同じ職場(美術工芸学校)でどんな教育を行っていたのだろうか、また髙島屋ではどのような染織作品を制作していたのだろうか、という疑問を感じないわけにはいかない。この疑問について資料を示しながら論じることにしたい。

2. 美術工芸学校

神阪雪佳と竹内栖鳳が共に勤務した学校は、幸野楳嶺(こうのばいれい)が明治11年「画学校設立建議書」を京都府の槇村知事に提出したことから始まり、明治13年に創立された京都府画学校である。ちなみに日本で最初に設立された美術学校であった。

京都府画学校の出発時点では日本画の4流派をもって4学科が構成されていたが、明治20年には「応用画学科」(後のデザイン学科)が創設された。

幸野楳嶺は画学校の根幹をなした人物であり「画学校教頭心得(副校長)」という役職についた。楳嶺は幕末明治初期の京都画壇の中心的な日本画家であり、明治初期の混乱期に日本画を美術だけでなく京都の地場産業(染織、金工、陶器などの工芸作品)に役立てることを目指して京都府に設立を働きかけた経緯があった。この時点では芸術家を育てることではなかった。このことは彼が書いた「画学校設立建議書」に明確に記されている。(註3)

現在、産学協同というテーマは新しく聞こえるが、明治時代の京都では美術工芸学校と地場産業が結びついていた。実業界と学校をつなぐ色々な方策が採られていた。実際に神阪雪佳は図案家として実業界と学校を結ぶキ

ーポイントの役割を果たしていた。

仮に産業界の業者からの工芸品の図案（デザイン）の依頼が学校あてに申し込まれたとする。学校での窓口担当者は雪佳である。業者から求められた図案（デザイン）に対して、雪佳は学生を使って図案を創作して業者に手渡したのである。この事業を円滑に行うため「応請図案調製規則（明治33年6月）」が作られた。雪佳がこの学校に着任したのが明治33年5月であり、この規則が明治33年6月に制定されている。この事実から見ても、神阪雪佳の学校内での立場はこの規則に準拠していると見て間違いない。

次にこの規則を検討してみたい。

○「応請図案調製規則」(註4)

第一条　美術工芸学校ニ於テハ該校規則第四条ニ基キ生徒ノ実習ニ資シ且本市ニ於ケル工芸ノ上進ヲ図ル目的ヲ以テ当業者等ノ依頼ニ応シ各種ノ美術工芸図案ヲ調製スルモノトス

（中略）

第四条　応請図案ノ外美術工芸学校ニ於テハ職員並ニ専攻科等ノ生徒ヲシテ各種ノ図案ヲ調製セシメ当業者等ノ望ニヨリ相当ノ調製料ヲ以テ之ヲ交付スルコトアルヘシ

第1条において、この学校では生徒の実習の役に立ち、同時に京都市における工芸の質の向上を図る目的において業者から依頼のあった場合には各種の美術工芸品の図案を調製して渡すことが明確に記されている。その担当者は誰か、といえば神阪雪佳であった。

第4条では、図案の他にも職員（教員）や専攻科の生徒が制作した作品などは相当額の料金をもって売却することもできた。

さらに産業界と学校の関係を円滑にするために「美術工芸学校商議員規程（明治36年11月）」（市達第233号）が作られた。この規程は京都の産業界の重鎮を商議員として学校の関係者に取り込むことが述べられている。つまり、商業を学校に持ち込むことを認めていた。次に示すのは明治38年の図案科卒業制作である。

雪岡　潔「暖炉隠し図案」
美術工芸学校図案科　明治38年卒業制作

明治後半期のヨーロッパではアール・ヌーヴォーが席巻していた。時期的には明治23年から明治43年の時期にこのデザイン潮流が最高潮に達したのであった。この卒業制作がこのヨーロッパの流行を取りいれていることはすぐに理解できよう。衝立としてデザインされていることも理解できる。

この作品の題名に注意してほしい。「暖炉隠し図案」とあるが「暖炉隠し」とは何か。

この題名の意味を理解するためには当時の世界の事情を知る必要がある。アールー・ヌーヴォーの源泉は日本の美術品を元にした「日本趣味」である。そして「暖炉隠し図案」とはヨーロッパの家庭で夏には使わない暖炉を隠しておくためにこのような日本製の衝立が流行したのである。英国のリバティ百貨店の通信販売用カタログにはこの衝立形式や屏風形式の「暖炉隠し」がたくさん掲載されている。需要は海外にあって、国内（京都）ではこのような衝立が生産されたものと思われる。そして輸出用工芸品の図案が当時の卒業制作として残されたことになる。

さらに図案科の卒業制作を年代順に並べてみると、神阪雪佳が正式の教諭になった後の明治35年頃を境にして図案化が進んだことも見てとれる。

本論では図版を列挙することが出来ないが、従来の図案科卒業制作の特徴は日本画のような作品である。これは先に述べた幸野楳嶺の発案になる日本画を美術だけでなく京都の地場産業（染織、金工、陶器などの工芸作品）に役立てるため、まずは日本画教育が行われていたことを示している。これに対して雪佳が教員となってからは、現代的な意味でも図案教育が行われたようである。その進展をこれらの卒業制作から読み取ることができる。

京都市立美術工芸学校
校友会誌「美」
明治43年11月号

この雑誌に掲載された作品には「画帖画　神阪雪佳筆」と印刷されている。雪佳が教員として勤務する学校の校友会誌であるから、氏名の誤字とは考えにくい。この事実も提示しておきたい。

次にこの美術工芸学校における竹内栖鳳の活動について考察したい。

栖鳳は明治16年に京都府画学校出仕として勤め始めたが、明治27年、京都市美術工芸学校教諭として採用された。師匠であった楳嶺が没した後、栖鳳がその後をついで教諭になった。栖鳳はこの学校でどのような役割を果たしたであろうか。

栖鳳は明治33年にパリ万博視察に出張したことは先に触れた。その帰国後から卒業制作の表現に大きな変化が現れている。教育の面では運筆手本画の放棄（運筆＝表現の型を決めていた）を推し進めた。運筆の代わりに「写生」を導入して日本画の空間表現・立体表現・運動表現などに特徴ある新しさを持ち込んだ。栖鳳の京都画壇での活動や「写生」を主導した立場から考えて、これらの教育面での変化は栖鳳が中心となって行われた。(註5)

栖鳳の果たした役割を直接、指摘できないので教育効果が現れている卒業制作を取上げて分析することにしたい。

上原正次郎「鐘聲」
明治36年
美術工芸学校
日本画科卒業制作

この風景画における樹木の表現は従来にないまったく新しいものである。生い茂った枝葉をひとつのまとまりで表現している。また小さな道が画面手前からゆるやかな丘を越えて向こうの空間に繋がっている。作品を観る人の視線はこの道が導線となって画面奥にむかって導かれてゆくのである。このような空間構成もいままでにはない新しい空間を意図している。

作品題名は「鐘聲」である。それは画面奥にある建物（寺院？）からの鐘の音が聞こえるほどの近距離であるが、視線は大きな樹木に目を遮られている状況を立体的に表現しようとしたと思われる。

この疾走する馬の動きは従来にはない表現である。後脚をあいまいにぼかしているが、疾走する表現としてきっちりと描くよりももっと運動感がでている。飛び跳ねている軍装品や手綱も運動感の表現を支えている。

岡　俊亮「奔馬」
明治38年
美術工芸学校
日本画科卒業制作

馬は画面右後から画面の左手前に向かっている。その際に馬の後脚は画面端で切れているのに対して、前方の脚は画面内でしっかりと描かれている。これも馬が疾走していることを示している。また画面左端に空間があるのは進行方向の空間を空けている。ちょうど疾走する汽車や車の映画のシーンを思わせる画面の作り方であろう。

美術工芸学校の卒業制作を検討材料にして、美術工芸学校での神阪雪佳と竹内栖鳳の果たした役割を検討したのであるが、両者はそれぞれの分野で先進的な教育を行って、新しい時代を担う学生を育てたと結論づけることが出来る。学術論文であれば、竹内栖鳳の影響下でこの事態が推移したことを実証しなければならないところであるが、その点は註5の論文を参照してもらいたい。

また大正期以降の京都画壇の日本画家は、ほとんどがこの学校の卒業生などの関係者で占められる。そのため、栖鳳の影響力は非常に大きくなったことも事実であろう。

神阪雪佳と竹内栖鳳は同じ学校に勤務していたことは何度も述べた。ふたりはどのような付き合い方をしていたのだろうか。同じ学校に勤務していた事実と、仲がよかったかどうかは関係がない。日出新聞の明治43年11月19日付けの記事「美術工藝」欄には次のようにある。

神阪雪佳氏は美術工芸の視察として東上中であったが・・・（中略）△雪佳氏は東上中栖鳳氏と共に新築中の帝国座を見た雪佳氏は

旨として建築の様式を研究し、栖鳳氏は例の天井画に就いて何か見るところがあったのであろう。天井には天女が描かれて居て　それが何れも天平式風俗を応用し而もハイカラな舞踏を試みて居るような趣もあるなどチョイと風変わりのものだそうだ。和田英作氏が主任となり東京美術学校卒業生其の他を指揮して遣って居ることを能く人の知る通りである△・・・（後略）　（註6）

この新聞記事によれば、神阪雪佳は美術工芸の視察のため東京に出た時に、栖鳳と一緒に新築中の帝国座を見学した。栖鳳は文展審査員であり、この日は文展の東京展会期中であったから、栖鳳は文展の関係で東京に滞在していたものと思われる。見学の目的は雪佳は建築様式の研究のため、栖鳳は天井画を見るためであった。栖鳳はずっと懸案であった東本願寺大師堂門（山門）に天井画「天女舞楽図」を描くため和田英作が制作した「天女」を参考に見てみたかったのである。新聞記事には和田が描いた天女の説明が続いている。

そしてこの記事から両者の関係を推し量ると、両者は別の学科に所属していた割には親密な関係にあった、と考えていいのではないだろうか。

3. 髙島屋

髙島屋は天保2（1831）年に京都市内の烏丸通松原に呉服店を開設した。詳細な点は省くが、明治中頃から新しい染織作品の制作と輸出を始めた。この時期、同じ京都市内の千総が「ビロード友禅」という染織技法の作品を創り出した（註7）ビロード地に友禅染めで図様を染めるのである。ビロードは元来ポルトガル製のものがあったが、友禅と組み合わせ、新しい図柄で染めることに新鮮味があった。従来の図柄は専門職人が担っていたのであるが、図柄は通俗化していた。その図柄を専門の職人ではなく、当時の日本画家に担当させた点に千総の独創性があった。そのやり方を取り込んで大型染織作品を仕立てて海外万国博覧会に出品、海外輸出品としたのが髙島屋であった。そして明治20年代頃から、神阪雪佳と竹内栖鳳は共に髙島屋で染織作品の原画制作をおこなっていた。髙島屋において栖鳳は段々と重用されていく。（註8）

次に神阪雪佳と竹内栖鳳の作品原画を示して検討してみたい。

これは髙島屋史料館に保管されている神阪雪佳の図案のひとつである。原画の右側に注記とサインがある。注記には「暹羅王族注文　象背掛　明治四拾三年四月　神阪雪佳」と読める。

「暹羅王族」というのは現在のタイ国のことである。年記にあるように明治43年、タイの王族から象の背中に掛ける敷物の注文を受け

た髙島屋は神阪雪佳にこの注文の図案制作を依頼した。

外国の王族から染織作品を受注したことは髙島屋にとっても名誉なことであり、丁重な対応をしたに違いない。そこで、この依頼を神阪雪佳がこなしたという事実は神阪雪佳が髙島屋の中で信頼される立場にあったことを示している。

図柄は孔雀のつがいが2組描かれているが、この原画を見ていると天地が逆になっている。象の背中に掛けた時に両側に垂れ下がって敷物の図柄が左右それぞれ天地にあうように配置されている。また赤い房飾は片側だけに描かれているが、実際に制作された際には両側に房飾がつけられることが前提になっているのであろう。

この作品は雪佳本来の近代的な琳派様式のデザインではない。しかしクライアントの要求に応じて作品を制作するのもデザイナーの役割である。この場合のクライアントは髙島屋であり、「暹羅王族の気に入るような日本物のデザインで」という注文であったものと思われる。またサインが「神阪雪佳」となっている点に注意しておきたい。

髙島屋が明治43(1910)年、日英博覧会に「ビロード友禅壁掛　世界三景　雪月花」3幅対を出品した。

当時の著名な日本画家3名、都路華香、山元春挙、竹内栖鳳に依頼した。世界の風景を「雪月花」と共に描く、という趣向であり、日本画を原画にしてビロード地に友禅染で図柄を描き出す、という考えであった。作品のサイズが縦2.2㍍×横1.75㍍という大型染織作品であった。この3名の画家は文展の重要作家であり、同時に京都市立美術工芸学校の校長、教員であった。

竹内栖鳳「ベニスの月」

これは現在、髙島屋史料館に保管されている栖鳳の原画である。栖鳳は月明かりのヴェネツィアの大運河の入口付近を描いた。月光の西洋風景画を水墨調で描く、ということに主眼点があったようである。(註9)

このように髙島屋においては神阪雪佳と竹内栖鳳はそれぞれの特徴を生かして染織作品の原画を描いていたことがわかる。

神阪雪佳と竹内栖鳳は同じ土俵(美術工芸学校と髙島屋)の中で活動したわけであるが、その活動内容はそれぞれの資質に応じて、興味深いものとなっている。今回はこの土俵の中のふたりに焦点をあててみた。

神阪雪佳と竹内栖鳳にはこの土俵以外にそれぞれ本来の活動領域があって、そこでも独自に活躍したが、それについて今回の講演の範囲外ということになるので割愛することにしたい。

今回、図書館主催で「神阪雪佳」の展覧会が

錦華殿の展示室で開催された。その展覧会行事の一環として、平成21年11月28日に講演会も開催された。講演会当日はパワーポイントで写真や作品といったことばにならない資料を呈示した。本論は講演内容をコンパクトにまとめたものである。

講演で使用した資料について、髙島屋史料館副館長廣田元氏、次長中井義裕氏には資料提供を受けた。また京都市立芸術大学付属図書館係長松尾芳樹氏、寺村美奈子氏の協力を得た。記して感謝したい。

註1　この学校の校名変更について次にリストにしてまとめておきたい。

校　　名	時　　期
京都府画学校	明治13年～20年
京都市画学校	明治20年～23年
京都市美術学校	明治23年～26年
京都市美術工芸学校	明治26年～33年
京都市立美術工芸学校	明治33年～昭和22年

明治42年に上級学校として京都市立絵画専門学校が設立された。これが現在の京都市立芸術大学の母体である。

註2　榊原吉郎編「近代の琳派 神坂雪佳」昭和56年1月　京都書院
原田平作「竹内栖鳳」昭和56年5月 光村推古書院

註3　京都市立芸術大学百年史編纂委員会編「百年史　京都市立芸術大学」昭和56年3月　京都市立芸術大学

註4　同上　pp149

註5　拙論「京都画壇近代化の一様相 美工から絵専へ」『美学』157号　平成元年6月　美学会

註6　記事の表現を現代口語に変換、句読点も廣田が振った。また記事の文中で「栖鳳氏は例の天井画」と書かれていて、新聞記者と読者はお互いに理解されている内容は次の通り。明治43年頃、東本願寺第23世法主大谷光演は大師堂門(山門)に天女舞楽の天井画制作を栖鳳に依頼した。そのため栖鳳は天井画に描く天女の研究を始め、実際の女性モデルを使って天女のポーズを研究したり、各地に残る古い天女図を模写して集めたりした。この構想のために和田英作の描いた天女を見たかったのだろう。大正4年まで栖鳳は天女研究を持続したことがわかっているが、最終この天井画は完成されないままに終わった。
また公共性の高い新聞記事の中でも「神阪雪佳」と記述されている。

註7　黒田天外「名家歴訪録」(日出新聞掲載)ここでは国立国会図書館所蔵の同書マイクロフィッシュ版から引用した。本来の書誌事項は著者：黒田譲、明治32年発行。

註8　拙論「明治期後半から大正初期の髙島屋における竹内栖鳳の立場」『デザイン理論』44号　平成16年5月　意匠学会

註9　拙論「竹内栖鳳の西洋風景画制作について－写真利用に関する一考察－」『デザイン理論』39号　平成12年11月　意匠学会
拙論「竹内栖鳳の西洋風景画制作について(新出資料を主にして)」『生活造形』48号　平成15年2月　本学家政学部生活造形学科研究紀要

掲載図版の所蔵先一覧

○京都市立芸術大学附属芸術資料館および同大学附属図書館
雪岡　潔「暖炉隠し図案」美術工芸学校図案科　明治38年卒業制作
上原正次郎「鐘聲」美術工芸学校日本画科　明治36年卒業制作
岡　俊亮「奔馬」美術工芸学校日本画科　明治38年卒業制作
京都市立美術工芸学校校友会誌「美」　明治43年11月号

○髙島屋史料館
神阪雪佳原画「暹羅王族注文　象背掛」明治43年
竹内栖鳳原画「ベニスの月」明治40年

「琳派の雪佳」

細見美術館学芸員　福井　麻純

神阪(坂)雪佳を語る上で外せないのが「琳派」である。活躍期より雪佳は琳派の一員とされ、現在も近代琳派の代表者と位置付けられる。本講演では、雪佳が琳派を通じてどのような芸術を目指したのか、雪佳の残した言葉、時代背景、そして実際の活動や作品を見ながら考えることを目的とした。

1. 雪佳の琳派観

雪佳は特に、本阿弥光悦と尾形光琳に憧憬の念を抱いていた。光悦については、「光悦の藝術は實に世界無比である、絶體である」(「光悦の芸術」、『京都美術』第37号、大正4年12月)と絶賛し、また光悦が古の作品を研究していると分析している。雪佳の光悦会への参加、光悦忌での活躍などからは、光悦への高い関心がうかがえよう。技術者を活かして自らの美を追求した光悦の姿勢に、芸術家としての理想を重ねていたようである。

一方、光琳については「古畫に對する着眼が頗る鋭く(略)」(「光琳の絵画と蒔絵」、『京都美術』第36号、大正4年8月)と評し、光琳の古画への関心を見出している。これを意識してか雪佳の遺品には、絵巻の模写などもあり、雪佳が光琳を通じて伝統的やまと絵学習の必要性を感じていた様子がわかる。また雪佳は、光琳の二百回忌がとり行われた際にも活躍しており、名実ともに琳派を継ぐ者として世間からの評価を受けた。

雪佳は光悦、光琳の作風について、独自性を強調する一方で、古い伝統的な様式を研究していると読み取った。つまり彼らを個性的であると認めるのみならず、伝統を踏まえた上で、その時代にふさわしいものを創作したという点を最も評価している。このことは雪佳の制作態度に大きく影響を及ぼしたといえる。

2. 雪佳作品にみる琳派

雪佳の作品には、琳派が得意とした草花を描いたものも多く、明快な色彩や大胆な構図など、琳派の手法が取り入れられている。ユーモラスで軽妙な人物図にも、琳派との共通性が見出せよう。また代表作『百々世草』では、表現の多様性に意匠家・雪佳の真髄が表われている。『ちくさ』には、料紙装飾の継紙を思わせる色面の利用や、細やかな文様表現が見られ、波や蝶をデザイン化した『海路』、『蝶干種』は、伝統的主題への挑戦とも解釈できる。

雪佳は図案や工芸品の研究団体を立ち上げ、積極的に図案を提供し、京都の工芸界の躍進を図った。制作者と密接な距離感で活動をしていた雪佳は、図案制作には用途と価格を意識しなければならないとも述べており、現実的な視点に立って図案を制作するよう心がけていたことが分かる。

雪佳の図案は、琳派を意識しながらもこれ

にとどまらず、伝統的な表現法を積極的に取り入れている。新鮮な感性が見出せる一方、古様な表現が共存している点が、同時代の図案家とは異なる雪佳の特質である。

3. 近代の琳派評価と雪佳

アール・ヌーヴォーなどの流行を背景に、日本では明治30年代より光琳を称賛する動きが盛んとなっていた。海外からも注目された光琳は、雪佳のような図案家として活動していた者にとっては、避けては通れない人物となっていたに違いない。雪佳自身、師の岸光景の影響で琳派研究を始めたとされ、明治34年のグラスゴーで開催された博覧会の視察を経験し、琳派への意識がより高まったという。

雪佳は「神阪雪佳氏の意匠工芸談」(『京都日出新聞』、明治35年1月28日付)で、アール・ヌーヴォーについて「曲線應用とは誰が附したる譯

四季草花図屏風　神阪雪佳

名かは知らざれども佛國にては然か言はずアルヌボー卽ち新美術と稱し居れり我藤原鎌倉時代の製品は凡て曲線應用にして今更珍しく喋々する程の事にあらず(略)」と酷評している。雪佳はここでは琳派に触れていないが、「藤原鎌倉時代」からの伝統は、当然琳派にも具わっていると考えていただろう。

また「圖案に就て我國にては或は古歌の意を取り或は古人の製作を折衷する等一事一物其見へた丈にては納得せず必ず故事來歴のあるを喜ぶも彼地にては卽之に反し見たまゝのものにて納得す、此邊より察すればどうしても意匠圖案等に就ては我國の方が一歩進めるが如し、されば歐洲人の注文は我國人の注文に應ずるよりも甚氣樂なり」と述べる。絵画や工芸が、文学等と密接に繋がる日本の手法を知る雪佳からすれば、この渡航は日本の芸術の優位を強く実感した旅であり、自身の方向性を決定づけるものとなった。

4. 雪佳の琳派

多くの画家たちが琳派を意識して制作を行う中で、雪佳は様式を表面的に真似るだけではなく、制作のスタンスそのものに共感していたことが特徴である。装飾性という言葉で琳派が語られる現在、雪佳の琳派的要素としてデザイン性に注目しがちであるが、伝統的に受け継がれてきたやまと絵の緻密な表現、文学との密接な関係、人物や動物をユーモラスに愛らしく捉える眼差しといった、装飾性以外の琳派の特質、つまり琳派が意識してきた伝統美のアレンジを雪佳はきめ細やかに読み取り、自作に反映している。絵画と工芸の境界、芸術家のあり方なども含めて、琳派に学んだ雪佳は、実に示唆に富む活動を展開している。

日本人のうちに受け継がれた伝統的な美意識が内在しているからこそ、雪佳作品は現代の私たちでも違和感なく親しみやすいものとして受け入れられるのである。

『百々世草』神阪雪佳(芸艸堂刊)　八つ橋

狗児

若松鶴図文机・硯箱　神阪雪佳 案・図

帰農蒔絵煙草箱　神阪雪佳 図案
神阪祐吉 作

老松文鉢　神阪雪佳 画
六代高橋道八 作

楓鹿図赤楽香合　神阪雪佳 案・図
五代清水六兵衛 作

『ちくさ』神阪雪佳（芸艸堂刊）　そなれ松

絵巻物

「雪佳の図書の問題」

短期大学部教授　八木意知男

はじめに

「神阪(坂)雪佳」という稀代の図案家の図書資料を追うと、幾つかの疑問が生じて来る。

(1)先考の職への疑問
(2)「神阪」姓への疑問
(3)「雪佳」号由来への疑問
(4)パトロンの有無への疑問
(5)図案集形体発明への疑問
(6)図案形成への疑問
(7)文事への疑問

等がそれである。これら疑問は勿論相互に関連することであるが、良くは把握出来ない。

そこで、これら疑問の整理を兼ねて図書館資料を読む営みと雪佳資料を扱う図書館の苦悩の一部にふれてみたい。

一

「神阪雪佳」なる名の「神阪」は、「元来、『神坂』であるべきを戸籍係が誤って『神阪』としてしまった」とされ、これが定説化されつゝある。この定説化は、図書館としては大きな問題を抱えることになる。すなわち、著者名表記が「神阪雪佳」となっているにも拘わらず「神坂雪佳」名で登録されてしまう方向が生じていることである。原著者名が抹殺される方向と言えば過激にすぎるか。この問題の延長線上に重版書の在り方もある。

例えば、『漫(瀧)図案』(明治36年)は「神阪雪佳」名で出版されたが、平成15年の重版奥付では「神坂雪佳」名となっている。この場合には元版の奥付も添えられている故、小ましではあるが、何の必要があって著者名を変更するのか不明と言わざるを得ない。

また、大正二(1913)年から大正五(1916)年にかけて『京都美術』誌上に雪佳は、三編の論評を寄せている。これの執筆論者名は「神阪雪佳」である。当時、『京都美術』誌の編者は「神阪雪佳」であり、印刷上の誤りとは言い難い。

すなわち、雪佳の意志あるところで「神阪」名は用いられており、戸籍上の誤りか否かとは別して、「神阪雪佳」名も登録記録されなければならないと考える。事実、雪佳は「神坂」姓と「神阪」姓を遣い分けをしていると思量される。

恐らくは処女作であろう明治二十三(1890)年の『別好(京染)都乃面影』では「神坂吉隆」名を用い、第二作『精華』(明治二十七年)では「神阪雪佳」名となっている。故に、この明治二十三年から明治二十七年の間に「神坂」と「神阪」を遣い、且つ雅号「雪佳」も得ていることになる。『京都美術』誌を見るとその編集者名は

神阪雪佳　一·二·三·四·五·(十六)·(十七)(十九)·(二十)～(四十六)
神坂雪佳　(六)～(十五)·(十八)

と動く。更に『新図案』誌(二)·(三)には次の如く見える。

（電子複写ニテ150倍ニ拡大）

ここでは「神阪雪桂」となっている。印文は「雪佳」であり、明治二十五(1892)年、当時27歳の吉隆は「神阪雪桂」とも号していたのである。

故に、雪佳の著作は原著者名を最重視すべきであり、「神坂雪佳」名への統一は異常なる事態と言わざるを得ない。

二

雪佳の本は、大きく分けて四つの形態に分類され得る。すなわち、

一　袋綴本
『別好京染都乃面影』(明23)・『ふきよせ』(明38)・『日本女装』(明39)

二　折　本
『ちくさ』(改装本)・『染織図案海路』(明35)・『漆器図案』(明36)・『百々世草』(明42・43)・『蝶千種』(明37)

三　大和綴〈結び綴〉
『しきし』(明34)・『衣かへ』(明34)・『うた絵』(昭9)・『競華』(明37)・関係雑誌のほとんど全て

四　揃い物
『精華』(明27・28)・『ちくさ』(原本)(明32・33)・『あしで絵』(昭19)

の四種である。

折本は「画帖仕立て」と別称される程に画帖の定番である。従って、雪佳の図案集がこの形態をとるのに何ら不思議はない。しかし、『ちくさ』が元来が揃い物として出版されたことを考えるならば、別の視点が用意される必要がある。

そもそも雪佳の図案は、実用の為に存在した。染織や漆工等の為のものである。従って、選び出された図案が、簡便に自由に扱い易く手許にあることが求められる。この求めに最も適しているのは綴じ合わせていない揃い物様式である。次いで、「結び綴じ」とも称される所謂「大和綴」がある。

「大和綴」には袋綴状にした唐綴と、列帖装状態の大和綴とがあるが、雪佳関係雑誌や関係図案集の多くは唐綴となっている。青木嵩山堂から出版され、後に芸艸堂に移った『美術画譜』や『御代の花』誌の後半などは上の様式

とも異なり、一枚ずつの図案画を折らずに重ねた「結び綴じ」としている。勿論、この綴紐は大変に凝ったものとなっている。しかし、この大和綴にされた図案集は、仕付けを解くことにより簡単に一図を摘出することが可能である。実用上の機能を良く考えた様式と言い得る。折本にこの実用性はない。故に、実用上からは、

揃い物 → 結び綴 → 折　本

となり、揃い物の『ちくさ』を折本『ちくさ』に改装した段階で、「揃い物は散り易いから」と謂う以上に、実用性を殺して鑑賞性を重視したのである。

こうした、実用性重視の装幀書籍の中で雪佳は様々に図案を展開提供したのである。

三

雪佳の図案は琳派の影響下にあると言われる。このことを否定することは難しい。しかしながら、雪佳画作の全てが琳派と称し得る訳ではない。次の如きがある。

桃太郎
『琳派の継承・近代デザインの先駆者 神坂雪佳』（以下『神坂雪佳』と略称）所載214・215・216・217・240-44

横笛
『神坂雪佳』所載240-42

六歌仙
『神坂雪佳』所載238、『百々世草』所載、『古代風俗（画譜）』所載

巴女
『新図案』所載、『百々世草』所載、『歴史画譜』所載

小督
『神坂雪佳』所載187

ここに見えるところ、「横笛」「巴女」「小督」は『平家物語』に語られる人物である。しかも、『平家物語』に題材を得て謡曲にもなっている。謡曲ということであれば『草紙洗小町』（『神坂雪佳』所蔵232・233等）も知られている。

雪佳が昭和三（1928）年御大典記念の能楽帖『楽未央帖』を制作し、これに先立つ大正十（1921）年には日岡耕漁と『能楽絵』（『能楽十二ヶ月』とも）を物していることは知られている。これ等は所謂「能絵」である。しかして、雪佳が謡曲を主題とする画を描いた事は否めない。そして、この延長線上で、「菊慈童」も、昭和十九年の『神坂雪佳遺作品展覧会出品目録』に載る『日本武尊図』も謡曲であろうか。

例えば、謡曲『草紙洗小町』（観世流による。梅若流では『草子洗』）では内裏歌合をめぐる話とされ、

> 神祇の歌は榊葉の庭火に袖ぞ乾ける、時雨に濡れて洗ひしは紅葉の錦なりけり、住吉の住吉の久しき松を洗ひては岸に寄する白波をさつとかけて洗ハん、

とする。すなわち、和歌に対する真偽判定を、和歌神住吉の冥助を以って行わんとする心性が語られる。さすれば、次の図書も謡曲を通して雪佳には常識の世界であったと考えられる。そして、和歌神への心性はやがて『うた絵』へと続くものである。

『百々世草』所載〈住吉図〉

雪佳が意匠図案の柱の一つとした「うた絵」は、多く『古今集』に依っているが、この『古今集』の仮名序にこそ

高砂住のえの松もあひをひのやうにおぼえ、

なる有名な言葉と、六歌仙が取り扱われているのである。この事は、雪佳を知ろうとする時、謡曲を無視しては有り得ず、謡曲に至る文学の研究―すなわち「文事」―としての『古今集』をはじめとする八代集や『平家物語』を考えること無しには成立し得ないと言い得るのである。

おわりに

そもそも琳派にとって、所謂『嵯峨本』はバイブル的存在であったはずである。中でも『観世流謡本』・『伊勢物語』・『百人一首』・『三十六歌仙』等は神阪雪佳と密接不可分な存在であったと考えられる。故に、雪佳の文事は、「嵯峨本」研究からはじめられたと思量されることである。しかるに雪佳研究の現状はそこに及んでいないと考えられる。

神阪雪佳を「琳派の継承者」と言うばかりでは何も解っては来ない。雪佳の画した全体像、そして雪佳本に対する知識すら、我々は正確に把握し得てはいないのである。ここに図書館資料としての雪佳図案がまとまって陳列されたことは、近代京都を考える為にも有意味なことである。

美術史も近代絵画も知らぬ吾人が、神阪雪佳「雪佳さん」を語ることが、如何に無謀な許されぬ僭越行為とは知っているが、それ故にこそ語ることが可能な事柄もあるはずである。蟷螂の斧に過ぎぬ事を承知の上で、所懐の一端を述べたのである。

廣田孝氏、福井麻純氏と同席出来た事を感謝申し上げる。

画人の書斎 ―雪佳の場合―

京都女子大学図書館「雪佳研究会」

はじめに

画人がその書斎に如何なる書物を備え、それをどの様に活用したかは、なかなかに知り得ない。『女子大通信』誌第96号（平成21年10月）に紹介の岡田（冷泉）為恭『栄花物語』の例等は稀有なものと言わねばならない。

ところで、神阪雪佳なる近代日本を代表する図案家の書斎に本阿弥光悦の消息巻が存在したことは、大正二1913年三月十日付『京都日出新聞』9265号に明らかである。この点については平成二十一年度第九回図書館資料特別展観図録『図書館資料によむ**神阪雪佳**』にふれている。しかし、それ以外について語られた事はほとんどない。そこで、雪佳所持の琳派絵画の一端を明らかにし、そのものが雪佳図案とどう関わっているかを検証する材料としたいと考える。

△雪佳図A　『百々世草』（京女図蔵）所蔵「白鷺図」

▷雪佳図B　『円窓図案』（京都国立近代美術館蔵）

△写真1　『会志』第8号表紙

一　京都美術青年会『会志』誌第八号より

昭和九1934年一月、京都美術青年会の会誌『会志』第八号は、「光琳研究」を特集する。この雑誌は、縦220粍×横150粍、全75頁の小冊子（写真1）。この雑誌には、大正十二1923年九月一日に発生した関東大震災により焼尽きたと伝えられる岩崎男爵家蔵光琳筆『松島図屏風』一双をはじめとする写真図版も多く載る。また神阪雪佳（「神坂」とする向きもあるが、本稿では原文通りとする）「光琳の絵画と蒔絵」が『京都美術』第三十六号より再録されてある。

当『会志』誌が企画として画期的なることは、大正四1915年の光琳二百年忌に際して催された東西二つの記念展覧会

①東京　三越呉服店　六月一日より三日間

②京都　府立図書館　六月二日より三日間

と、昭和八1933年度の日本美術協会展覧会の展示光琳作品、そして「入札に現はれたる光琳絵（千円以上）」を収載することである。

光琳二百年忌記念展覧会分としては①に

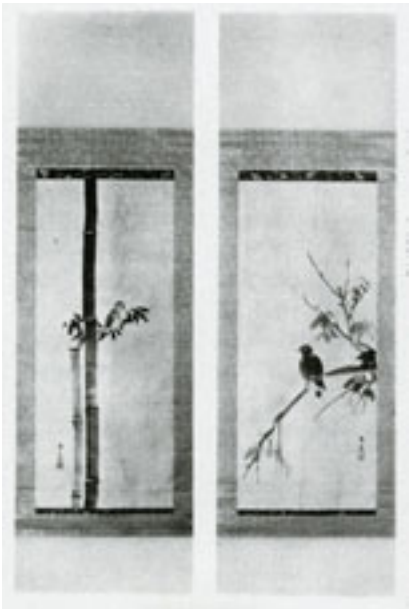
小督　内貴甚三郎

とあり、②には

白鷺　神阪雪佳

とある。すなわち、大正四年現在、内貴甚三郎は光琳筆

▷写真2　『内貴家所蔵品入札目録』表紙（梅逸画）



▷写真3　『内貴家所蔵品入札目録』所載光琳画

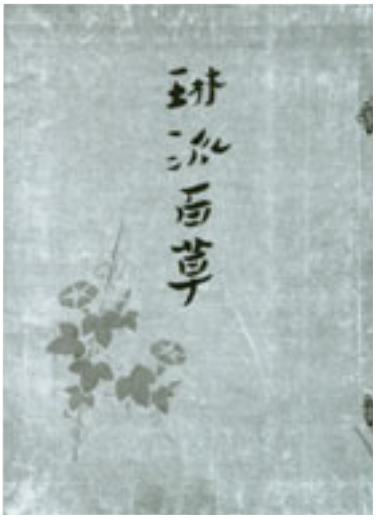
「小督図」を、神阪雪佳は光琳筆「白鷺図」を所蔵していたと知られるのである。大正四年と言えば、雪佳五十歳。六月に京都小川妙顕寺の光琳二百年忌を執行した年である。

内貴所蔵の「小督図」は、昭和八1933年十一月十五日に京都美術倶楽部で催された入札会目録『当市内貴家所蔵品入札目録』(内題、写真2)には見えず、これ以前に動いた可能性もあろう。山本梅逸の「双鶴図」が表紙を飾る当該『内貴家所蔵品入札目録』には

六九　光琳　水墨竹ニ雀古木ニ鳩双幅　竪三尺五寸九分　巾一尺五寸一分

が載る(写真3)。

また、同じ記念展覧会京都分には雪佳の所蔵品たる「白鷺図」が出品展示されたと伝う。神阪雪佳は、光琳二百年忌に前立つ明治四十二・四十三1910年に芸艸堂から『百々世草』(一～三)を刊行している。そして、そこに「白鷺図」が収録されている(雪佳図A)。さらに、京都国立近代美術館所蔵『円窓図案』中にも「白鷺図」(雪佳図B)がある。神阪雪佳が光琳筆「白鷺図」をいつ入斎したかは不明乍ら、原泉たる「白鷺図」はその書斎に存在したのである。



△写真4　『琳派百草』表紙
朝顔図は合羽摺

△写真5　『琳派百草』巻頭図 神阪雪佳蔵画帳
この画のみカラー版にて所載

二　『琳派百草』より

次に、大正十二1923年紀の序文を付す『琳派百草』を見る。

この本は、琳派の草木図七十六点を写真版にて備う。内一点は彩色複製。合羽摺「朝顔図」を表紙（写真4）とした当該書は、縦298粍×横225粍の大和綴本。本書には奥付等は無く、刊行年月日・編集名・出版者等を知ることは出来ない。巻頭の編集序文に

図案界の資料を提供せんとするのである。

とある如く、図案の為に編せられたもので、奉書紙二ッ折表（おもて）にのみ図版を刷るのはこの為と考えられる。

本書には、次の如く神阪雪佳所蔵品が備う。

ア　巻頭図……芳中草花着色復（マヽ）製
　　京都神阪雪佳氏蔵画帖の内
　　（注、フリージア）

イ　第五十二図　光琳筆「百合図」扇面
　　京都神阪雪佳氏蔵

ウ　第五十三図　光琳筆「白椿図」扇面
　　京都神阪雪佳氏蔵

エ　第五十四図　光琳筆「春草図」扇面
　　京都神阪雪佳氏蔵
　　（注、スミレ・ワラビ）

オ　第五十五図　光琳筆「露草図」扇面
　　京都神阪雪佳氏蔵

△写真6、7　『琳派百草』内、52・53図

▷雪佳図C　「紫陽花・百合図刺繍」（髙島屋資料館蔵）

▷雪佳図D　「紅椿図」（宮崎家具蔵）

▷雪佳図E　「白椿図」（宮崎家具蔵）

カ　第五十六図　光琳筆「額草図（ガクアンサイ）」扇面
京都神阪雪佳氏蔵

キ　自第五十九図、至第七十一図、　芦舟筆「四季草花」
京都神阪雪佳氏蔵六曲屏風部分

ク　第七十二図　宗達筆「ほうづき図」
神阪雪佳氏蔵幅

ケ　第七十三図　宗達筆「夏草図」
同氏蔵

コ　第七十四図　宗達筆「兎に薄図」
京都神阪祐吉氏蔵幅

サ　第七十五図　宗達筆「紫陽花図」
京都神阪祐吉氏蔵幅

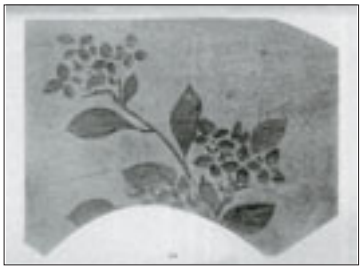
シ　第七十六図　芳中筆「芙蓉図」
京都神阪雪佳氏蔵画帖の中

右、十四点、コ・シは弟祐吉が蔵し、キは十三図であるが実際には六曲屏風部分である故一点となる。また、ア・シは同一画帖であるとするならばこれも一点である。故に、光琳筆扇面画を五点、芦舟筆屏風一点、宗達筆幅一点、芳中筆画帖一点、計八点を書斎に備うことになる。

上の図中、イの百合図（写真6）は、雪佳の扱う幾多の百合図（雪佳図C）に通う。また、エの「春草図」（写真8）のスミレとワラビの組み合わせも雪佳は多く描いている（雪佳図F）。

△写真8　『琳派百草』内、54図

△写真9　『琳派百草』内、55図


△写真10　『琳派百草』内、56図「額草」

△雪佳図F　『ちくさ』（京女図蔵）所載「ワラビ・スミレ図」

△雪佳図G　『円窓図案』（京都国立近代美術館蔵）

△雪佳図H　『ちくさ』（京女図蔵）所載「額草図」

三　雪佳図案の原泉としての書斎の琳派

上の第七十二図宗達筆「ほうづき図」（写真11）、これは『図書館資料によむ神阪雪佳』にも紹介の黒田天外記事「江湖快心録」に

壁上には伊年のほうづき数十を描ける横幅を懸たるが、とある品と同一のものと思量される。伊年は俵屋宗達の字（あざな）であるからである。而して、この宗達筆「ほうづき図」は、明治四十一1908年九月現在には雪佳の書斎に蔵されてあったのである。

また、写真7の「白椿図」、写真9の「露草図」等、何れも雪佳が扱った画題である。

一般的に、雪佳は琳派の継承者である、と言う。「継承者」とは何か。琳派の絵画と同趣の画を描いたが為に謂われるのか。そうではあるまい。雪佳が継承者たる所以は、琳派就中本阿弥光悦・尾形光琳の精神を尊び、そこに心を寄せ、画業に邁進したところにある。先師の精神を尊ぶ者はその業のみならず生き様にも目を向けるを常とする。故に、身近な所へその遺作を置き、追慕し激励する。

神阪雪佳は、「江湖快心録」で

師匠の岸氏などが、光悦、光琳は立派な意匠家なるのみならず、人物といひ、絵画といひ、実に稀世の豪傑であるから、せめて其筆墨の型だけでも残したいと

△写真11　宗達「ほうづき図」

▷写真12　宗達筆「夏草図」

▷写真13　芳中筆「芙蓉画」

のことで、私も絵画は楽しみとして、主として光悦、光琳の風を学んで居ります。

（漢字及び異体字は現在通行字体に改めた。また、ルビはこれを略した。）

と語る。故に、明治四十一年九月の時点ですでに明確に琳派の人であったのである。

おわりに

画人の書斎を覗うことは、極めて難しい。富岡鐵斎の如く蔵書印を捺した本が世に流通すれば一端を覗うことも可能となるかも知れない。しかし、それは極めて稀なことである。

神阪雪佳なる図案家の場合、その書斎の本が如何なものであったのか知るを得ない。わずかに『日本女装』（明治三十九年刊）にその片鱗が覗われるに過ぎない。そこで、雪佳が所蔵した先人の遺品を集成してみることにしたのである。

雪佳所蔵の先人遺品は、本阿弥光悦「消息巻」、尾形光琳「扇面画」五葉及び形態不明「白鷺図」一点、中村芳中「画帖」（巻冊不明）、俵屋宗達「画幅」三点、長沢芦舟「四季草花六曲屏風」（点数不明）、が確認された。何れも琳派と称される人々の作品である。光悦・光琳を慕う雪佳が琳派

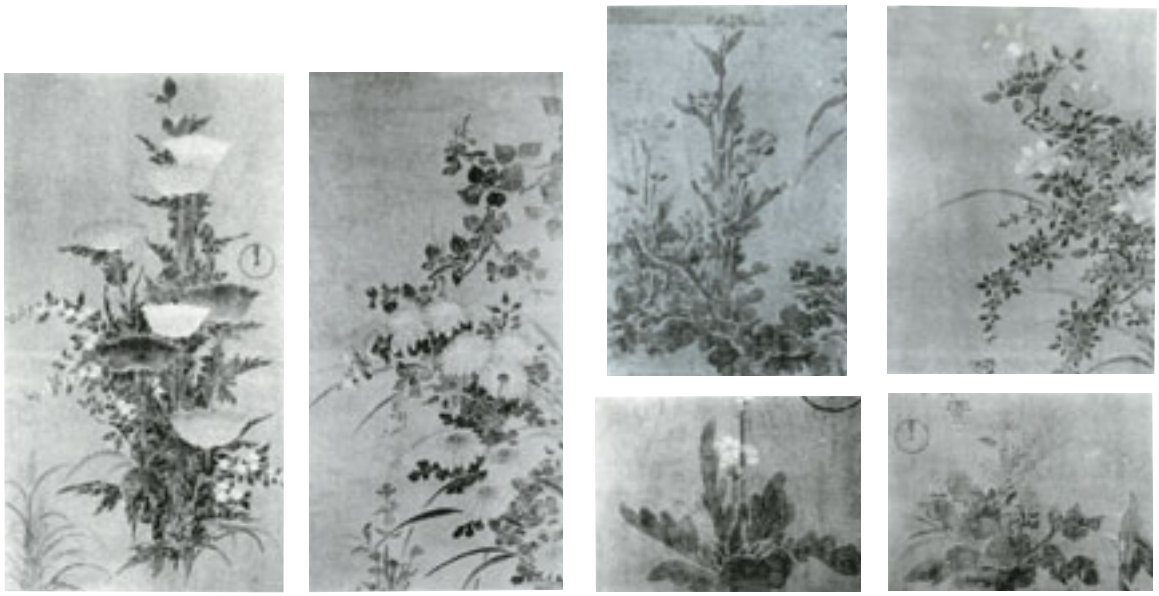
△写真14～20　芦舟筆「四季草花図六曲屏風」部分

の人々の作品を手許に置いた事実には何等矛盾はない。しかし、これが雪佳書斎の全てでもない。

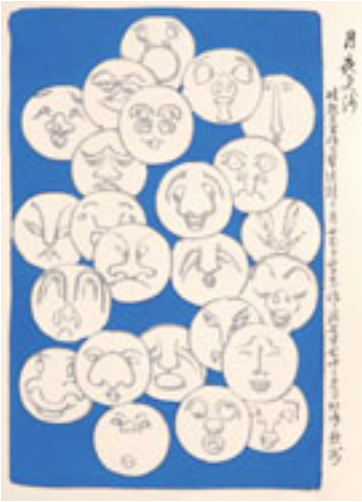
そして、雪佳が図案を考える時、これ等は参考とされた。蛇足乍ら言えば、雪佳は好事家でもなければ古美術愛好家でもない。故に、雪佳はここに学んだのであり、雪佳の原泉として機能した、と考えられる。

〔追記〕

内貴家の所蔵品は、昭和十五1940年五月にも京都美術倶楽部で売立られている。この折の入札目録も存し、応挙『楚蓮香』幅や岡田為恭『小督局』幅等は認められるが、光琳『小督』は見えない。よほど早くに動いたものかも知れない。ただし、当該目録には光悦『錫縁葛家香合』が載っている。この香合は東本願寺伝来と伝えられるものである。



△写真21～26　芦舟筆「四季草花図六曲屏風」部分



KWU Library News 発行／京都女子大学・京都女子大学短期大学部　図書館
〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町35番地
TEL: 本館 075-531-7070／分館 075-531-9010／雑誌室 075-531-7069
http://www.kyoto-wu.ac.jp/library/index.htm
平成22年3月発行